

小学校英語教育の充実

尾上 利美 (和歌山大学教育学部)・中岡 正年 (和歌山大学教育学部附属小学校)
林 真希 (和歌山大学教育学部附属小学校)・瀧本 知香 (和歌山市立安原小学校)
中村 正雄 (和歌山市立貴志南小学校)・宮崎 文花 (和歌山市立中之島小学校)
三龍 直人 (高野町立高野山小学校)

1. 研究課題について

昨年度に引き続き、連携校における英語教育の充実のために、新教科書の活用方法、教材・教具の開発、振り返りの方法、指導形態のあり方、低学年・中学年・高学年を見通す学習のあり方や授業づくり、ICTの活用、他教科と関連づけた指導等について実践的に研究を行うことが、本研究課題の目的であった。

2. 取り組みについて

新型コロナウイルス感染症への様々な対応が続く中、相互に授業を参観して直接意見を交わすという機会を設けることは難しかったため、メール等を活用した交流が中心となった。制限のある状況下ではあったが、和歌山大学教育学部附属小学校の中岡先生による「外国語×プログラミング」の授業実践が行われた。本実践の中の第5時が、令和4年1月29日(土)にオンライン開催された和歌山大学教育学部附属小学校「第14回ICT活用授業研究会」の研究授業として事前公開され、研究会当日は座談会がもたれた。研究授業のビデオ撮りが行われた令和3年12月2日(木)に、安原小学校の瀧本先生、中之島小学校の宮崎先生、研究代表者の尾上が附属小学校を訪問し、授業を参観した後、短時間ではあったが意見交換を行った。また、令和3年7月2日(金)に実施された林先生の研究授業には、安原小学校の瀧本先生も参観された。

3. 授業実践から

3.1 授業実践概要

子どもたちにとって外国語である英語を用いて自分の気持ちや考えを伝えることは日常的なことではないと考えられる。そこで、子ども達に海外の人に自分たちの地域のことを紹介する目的をもたせ、他領域と連携をとることで英語を活用する必然性が生まれると考えた。さらにICTを活用し、自分達にとって親しみがある和歌山についてPRするゲーム作りを提案した。そのことによりICTは成果物を作成するだけでなく、主体的な活動を支える教具にもなると期待した。

実践児童は6年生であり、身近な友達と改めてコミュニケーションをとることに楽しみや興味を持ち始めていた。今回の実践は、彼らにとっても適切なステップアップの機会になるのではないかと考えた。さらに、本実践では、子どもたちにとって関心が高いプログラミングを取り入れた。このことにより、外国語を活用するために必要な語句や表現を確認する反復活動は意欲的かつ継続したものになると考え、自身を投影したプログラミングの

キャラクターに話をさせることで英語の表記や発音の正確さを探究し、積極的に言語と表現のつながりについて考えることを期待した。つまり、プログラミング活動で自分の気持ちや考えを表現することで、語句や表現の理解が深まるとともに、外国語を活用したコミュニケーションへの興味関心が高まり、豊かに表現する子どもの姿がみられるのではないかと仮説を立てた。

本実践で活用する「Scratch」は、ビジュアルプログラミングで、子どもたちも直感的に操作を行うことができるため、子どもたちの積極的な活動を支えることになる。友達のゲームと比較することで自分の思いと他者の思いの考えやとらえ方の相違などにも気づきやすくと考えている(図1)。さらに、FLTの助言などを受けてより正確な外国語の表現についてのより良い表現を探究することにもなると考えた。



図 1 プログラミングで作品作成場面

授業の指導と評価の計画は以下の通りである(表1)。

表 1 授業の指導と評価の計画

<p>指導と評価の計画(全8時間) ※ワークシート(ワ)・プログラミング作品(プ)・児童観察(児)</p> <p>第1時 和歌山県をPRする活動を行うことと、伝えるために必要な表現の確認を行う。【態】(児)</p> <p>第2時 既習内容について確認し、書いたり、話したりして和歌山PRに活かすことができる表現を探す。【態】(ワ)</p> <p>第3時 PRしたい内容を考え、外国語で考えや気持ちを伝える表現について知り、会話文を考える。【態】(児・ワ)</p> <p>第4時 相手に共感する表現を確認し和歌山PRゲームで伝える内容について、FLTに相談する。【態】(児・ワ)</p> <p>第5時 「和歌山PRゲーム」を出し合い、感想を伝えあう。【態】(児・ワ・プ)</p> <p>第6時 「和歌山PRゲーム」をさらに改善し、感想を伝えあう。【態】(児・ワ・プ)</p> <p>第7時 海外の人にむけて和歌山の良いところを発表し、動画を撮る。【態】(児・ワ)</p> <p>第8時 学習の振り返りを行う【知】(児・ワ・プ)</p> <p>※総合的な学習の時間(全7時間)にて、プログラミングについて知り、和歌山PRゲームの作成を行う。</p>
--

3.2 実践結果

実践後、子どもたちにアンケート調査を行い次のような結果が得られた(図2)。

「プログラミングを使うことは外国語の授業に役立ちましたか。」の質問に対して、30人中28人が「役立った」と答えている。子どもたちがそう選択した主な理由は「外国の人に楽しんでもらうために考えて英語とプログラミングを繋げられたのでとても役立った。」というものが多くみられた。外国語でプログラミングを用いて和歌山のPRゲームを作ることによって、子どもたちは既習のことと関連させて、文字を入力し、自分の音声を録音する等、インプットとアウトプットを行っている場面を多くみることができた。この一連の活動によっ

て、子どもたちは自然と学習を深め、外国語の習得にもつながったと考えられる。

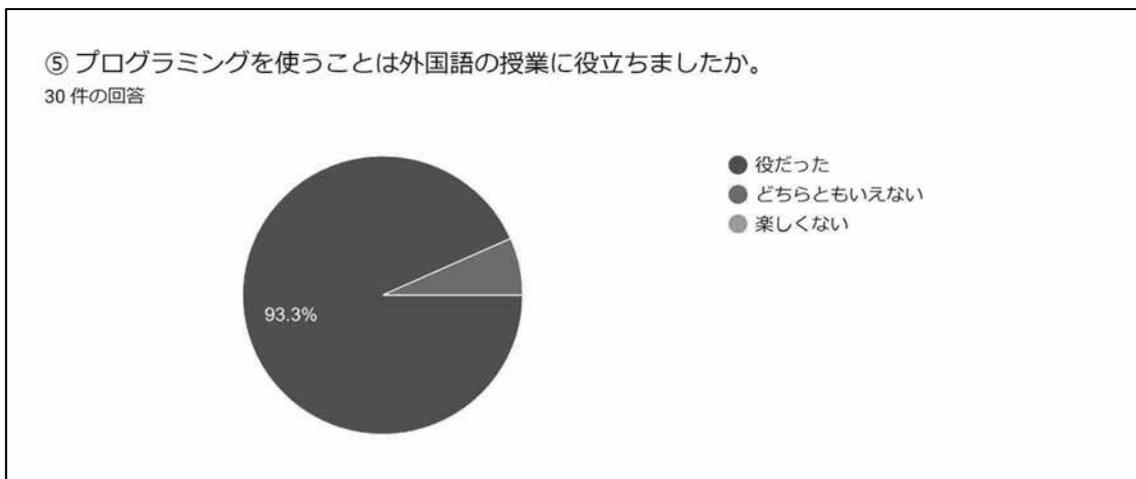


図2 「プログラミングを使うことは外国語の授業に役立ちましたか。」の問いに対する解答結果

さらに「2学期までの英単語や文章を読めますか。」質問に対しては、73.3%の児童が「読める」と解答している（図3）。

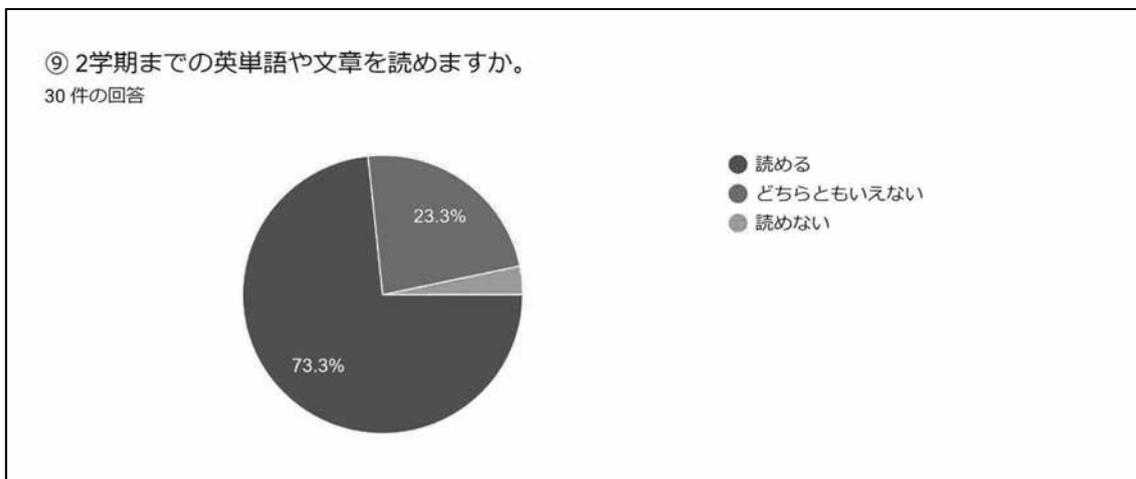


図3 「2学期までの英単語や文章を読めますか。」の問いに対する解答結果

このことも既習のことや教科書に書かれている内容から自分の思いに沿った成果物であるプログラミングゲームを作る過程で動画と文章や単語を往復することになったため、そのような結果が得られたのではないかと考えている。

これらのことは、アンケート調査だけではなく、授業後の子どもたちのワークシートにも同質の記述がみられた。

ゲームをすることによって、外国語の文字や音声に注意をし、より良いものにしていく中で、自分の今の外国語の習得について気付き、調整を繰り返していることがわかる。

一方、単元の目標は「読む」の「発表」であったため、「2学期までの英単語や文章を使っ

て発表できますか。」の質問も行い、次のような結果が得られた。

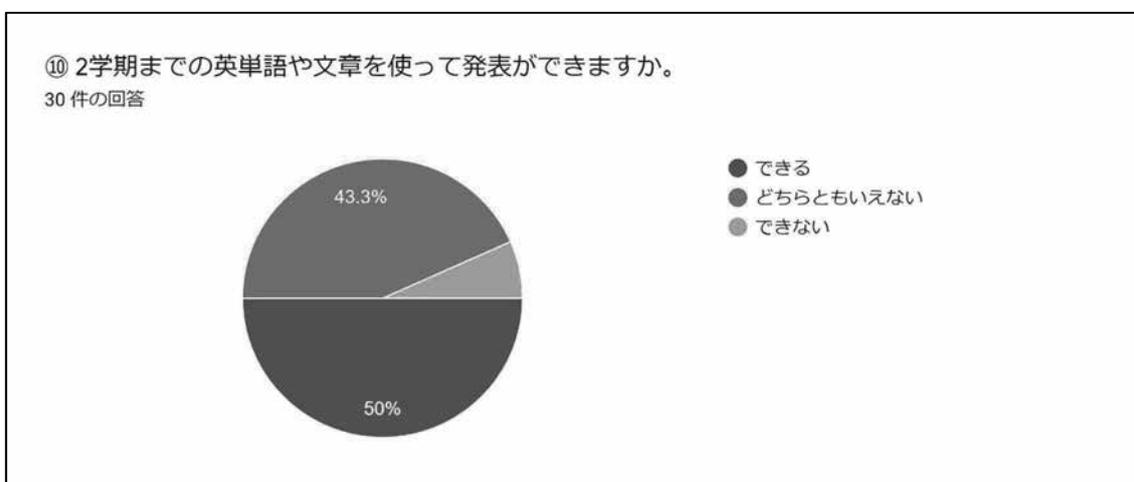


図4 「2学期までの英単語や文章を使って発表ができますか。」の問いに対する解答結果

本実践における、目標に関しては「できる」と考えた子どもたちは正に半数であった。このことに関して、子どもたちの考えは次のようなものが多かった。

・主な「できる」の解答理由

発音も先生に確認してもらったから。

授業で習得出来たから。

私は、和歌山のことで今までのや、共感するのを使ってできると思う

・主な「どちらともいえない」の解答理由

文章を使いぶんの考えを発表することは苦手だから。

覚えているので文章は難しいけど英単語はできると思います。

話すのがどんな発音なのかなどがわからない単語もあるからです。

・主な「できない」の解答理由

文章を使いぶんの考えを発表することは苦手だから。

発表の時は、ハキハキ言わないといけないけど、ハキハキ言えないと思うから

これらのことから、子どもたちにとって「発表」することにたいして、苦手意識をもって
いることやどこまでの発表を行うことが「発表」することになるのか考えていることがわか
った。

しかし、図2の結果にあるように93%の子どもが「プログラミングを使うことは外国語
の授業に役立ちましたか。」と感じており、また次のように彼らがとらえていることから
一定の効果があったのではないかと考えている。

・主な「役立った」の解答理由

和歌山県の紹介に役だってプログラミングのことが分ったことです。

より英語を知ろうとするようになったから。

プログラミングのゲームで、英語で吹き出しをつける時に役立ったから。

色々な単語も覚えたし、プログラミングも学びました。

3.3 成果と課題

本実践を通して、英語を使う必然性がある活動とコミュニケーションをとる必然性がある活動を関連させること、また他教科や他領域との連携を行い伝えたい内容を明確にすることで子どもたちが積極的に外国語を活用したいと感じているために効果的に作用するという見解が得られたと考えている。また、授業者も他の教科領域と連携を行い学習することでそれぞれの学習が独立したものではなくなり、子ども達にとっても学習の継続や転移が生まれたように感じている。

今後も、学習者である子どもたち自身が単元のゴールの姿を明確にとらえ、より実際の場をイメージできるような単元の設定や教具の工夫を行い研究、実践をしたいと考えている。

一方で、毎回そのような単元の設定は困難であることやコロナ禍における社会情勢も厳しいものが考えられるので、子どもたちが将来、教科の学習をきっかけに学んだ外国語の表現を使うことが必然になると考えられるような場面の設定を行う実践も構想していきたいと考えている。その方法として今回実践を行った、他の教科・領域との連携や ICT の活用は今後も自身の研究の中心になると考えている。

(中岡 正年先生)